

ピアチュータリングによる学習支援システムの構築に向けて

Towards Development of a Learning Support System with Peer Tutoring

—ハワイ大学マノア校の学習支援組織調査を例に—
- Based on Research of Learning Support Systems in University of Hawaii at Manoa -

野田 啓子^{1,4} 渡辺 雄貴² 美馬 のゆり³ 鈴木 克明⁴
Keiko Noda^{1,4} Yuki Watanabe² Noyuri Mima³ Katsuaki Suzuki⁴

立命館アジア太平洋大学¹ 首都大学東京²
公立はこだて未来大学³ 熊本大学大学院⁴
Ritsumeikan Asia Pacific University¹ Tokyo Metropolitan University²
Future University Hakodate³ Graduate School of Instructional Systems,
Kumamoto University⁴

<あらまし> 近年、国内の高等教育機関において授業外学習を支援する取り組みに関する関心が高まり、多くの実践が報告されている。本研究では、学生が学習支援に関わって行くプロセスにおいて、支援センターの教職員が提供すべき学習環境、制度および育成のための構成要件について、筆者らは米国ハワイ大学マノア校の学習支援組織を訪問し、各組織の目的やサービス内容、役割分担などについてインタビュー調査を行った。その結果、同校における実践事例から、我が国におけるピアチュータリングによる学習支援システムの構築に向けた要件として、多様なサービスの提供体制、組織間のゆるやかな連携、学生（ピアチューター）の公式的位置づけ、ピアチューター育成における質保証の仕組みがあることが分かった。

<キーワード> 学習支援 ピアチュータリング 高等教育 支援システム 学習環境

1. はじめに

学生生活実態調査(全国大学生生活協同組合連合会 2012)によると、1週間における授業を除く「大学の勉強時間」は平均で 4.58 時間、1日あたり 39.2 分であった。多様化する学生の学習ニーズを踏まえた上で、必要とされる学習時間を担保するためには、授業外学習時間を確保することが求められる。ラーニング・コモンズの開設など、設備面において学生の学習を支援し、主体的な学びを促進する環境の整備が進んでいるが、教職員による指導の他に、先輩や同年代の学生が自らの学習経験に基づき、学生（ピア）の立場から学習内容の理解促進や「学び方を学ぶ」支援を行い、学習者の意欲向上を引き出す試みとして、ピアチュータリング制度の導入・実践事例が増加している（谷川ほか 2012, 美馬ほか 2013）。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学生がピアチューターと

して学習支援に関わって行くプロセスにおいて、支援組織が提供する学習環境、制度およびチューター活動の質保証のための設計要件について調査、整理し、我が国における学習支援システムの構築に向けた課題を明らかにすることである。

3. 調査の概要

多様な学生のニーズに対応し、さまざま異なる支援組織が存在している米国ハワイ大学マノア校を訪問、調査することとした(2013年2月訪問)。学習支援を担当する教職員にインタビューし、実践事例を調査した。

3.1. ハワイ大学マノア校の学習支援組織

ハワイ大学マノア校は、オアフ島に位置する州立大学である。1907年に設立され、17学部・機関から成り、学部生約15,000名、院生約6,500名が在籍している。同校は、2006年に Office of Undergraduate Education (学士課程部) を創設し、2013年度現在、正課と

課外にわたって、広く学部学生の学びを支援する 20 のセンター・プログラムを運営している。今回の調査では、これらの多岐にわたる支援サービスのうち、広く学生全体を支援対象としたもの、学生（ピア）による学習支援（チュータリング）を実施している 4 つのセンターを選択した（図 1）。

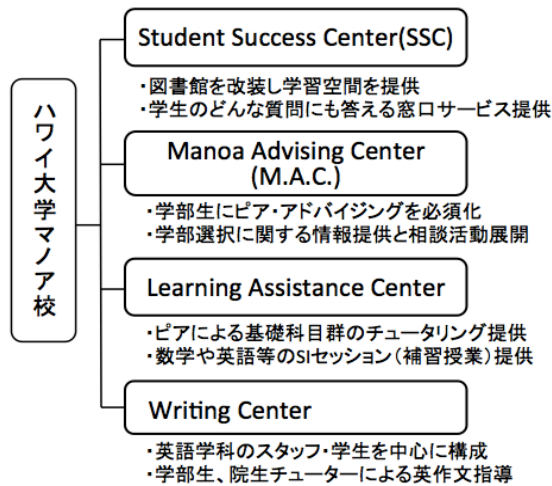


図 1 ハワイ大学マノア校訪問先組織図

3. 2. 調査の内容

各支援組織を対象として、(1) 学習支援組織の目的、(2) 学習環境（組織、センターの特徴）、(3) 提供するサービスの内容、(4) 組織・スタッフ体制、(5) 大学における役割・位置づけについて調査を行った。

学生チューターの育成について、CRLA チューター研修プログラム認証（第三者機関が定める研修ガイドライン（鈴木ほか 2011）、学内規程等で定められた質保証の実践が行われているかどうかについても調査した。

4. 調査結果

4. 1. Student Success Center (SSC)

SSC は、「学生のどんな質問でも受ける」ことをコンセプトとして、図書館（学内には 2 つ図書館があり、SSC あるのはそのうちの 1 つ）内に 2008 年に設置された。学生生活全般を支援する窓口としての機能を持つ。利用は無料。

同校の学生が、伝統的な図書館を望むというよりも、学習できる場所を望んでいるという実態を踏まえ、間仕切りのある個人用学習机、グループ学習用のエリア等を提供しており、フロア全体が学習スペースとなっている。センターの入り口には学生スタッフ用のデスクがあり、ここを訪れた学生の質問や要望に対応している。日曜日から金曜日までは、24 時間オープンしており、試験前にはおよそ 600 名以上の学生が SSC で夜を明かす。

具体的なサービス内容は、窓口対応に加え、SSC 内フロアの一部において、基礎的な科目を中心とした予約制およびウォークイン形式（予約不要）のチュータリングを行っている。なお、学生チューターの育成・勤務管理等は別組織である Learning Assistance Center（後述）が実施している。

近年、学習への準備が不十分なまま（Unprepared）入学する学生が増加しており、1 セメスター目ですまわずと次のセメスターで大学に戻らないケースが多い。大学として学業継続率（リテンション）に影響する要素についても調査検討を行う中で、SSC では 4 年制大学への進学を希望するコミュニティカレッジ生との連携の模索、アンケート、フォーカルグループインタビュー、学内の様々な部署が保有しているデータ、Assessment Office（各種データ・統計を作成、提供する部署）を活用しながら、多様な学生のニーズに応じて行くためのサービス展開を検討している。

組織的な位置づけとして、以前は図書館の一部門であったが、予算執行上の事情から、学士課程教育部の一部門として運営している。職員中心の運営形態を取っており、センター所属教員は配置されていないが、SSC の活動について、学部教員とのネットワークを構築し、協力体制を築きつつある。

学内における SSC の役割として、「学生が自立した学習者としての自信と情報リテラシーを身につけ、有能な学習者となるための支援を得ること」、「学習において力を発揮できるようにすること」、「効果的な学習、ライティング、情報検索スキルを身に付けること」、

「個人的及びグループでの支援を得ること」、「学内に存在するサービスへの適切な案内を得ること」の5つが列挙されている（同センターWeb サイトより）。大規模校における多様な学生のニーズに対応し、多数存在する学習支援サービスの中から、当該学生にとって有用なサービスへの誘導というコンシェルジュ的な役割を發揮しつつある。

4.2. Manoa Advising Center (M. A. C.)

同校の制度上、入学時に学部を決定せず、入学後に卒業に必要な単位を修得することで当該学部の学位を授与されることから、学部進学前の学生（Pre-major student）、自らの進路を決めかねている学生（Undecided student）学生に対して学部選択に資する情報提供や相談を行う。利用は無料。

また、教職員が相談相手となると、学生が萎縮してしまうことから、学生（ピア・アドバイザー：PA）によるピア・アドバイジングを2008年より開始した。アドバイジングを受けることは必須である。アドバイジングは個室ではなく、オープンスペースで行っている。他者の相談内容なども聞こえてしまう環境ではあるが、プライバシーへの配慮が必要な場合の対処、ピアでは対応できない込み入った相談などは、教職員アドバイザーへの引き継ぎを行い、PA と教職員が連携して運営している。

チュータリングとアドバイジングの違いについて、チュータリング授業科目の内容や学習方法に関する支援であるのに対し、アドバイジングは、学生生活と今後の人生のために何を選択するか、時間のバランス、家族との関わり方などについて支援を行うことを志向している。同校には他にも各学部にもアドバイザーがいるが、学部のアドバイザーが専門教育に関するサポートを行っているのに対し、M.A.C.では専攻決定前の学生にアドバイジングを行っており、支援内容は異なる。

M.A.C.は学士課程教育部の一部門であるが、センターの活動は学生部（Student Affairs）の建物の一角にあり、SSC とは離れた場所に設置されている。

体制は、関連する専門学位や職務経験を持つセンター専属教員（アドバイザー）4名が配置されており、PA の募集、雇用、トレーニングを行っている。訪問時、31名のPA が在籍しており、リーダーPA を中心に、先輩PA から後輩PA に対する助言や指導も実施している。トレーニングの内容は、大学組織の仕組み、自分の性格や思考について知ること、他人とどのように接すべきか等、広くベーシックな内容を実施している。ロールプレイを用いた実践的なトレーニングと、事後テストを行い、テストに合格しなかった場合はPA としての採用を見送っている。トレーニングメニューは担当教員が作成している。

学生（アドバイスを求める方）は、「本当の（REAL）アドバイザーに見てほしい」「年長のアドバイザーがほしい」との要望もあるが、ピアによるアドバイジングを続けていくとのことである。

なお、PA の給与は、大学からの奨学金という形で1セメスターあたり2,000ドル（約20万円）を授業料から減免している。同校には学部以外にも有料のカウンセリングセンターや就職の相談に対応するキャリアセンターがある。一人一人の学生の悩みはみな異なっており、M.A.C.だけで対応できるものではなく、園意味においてM.A.C.は学生にとっては一つの通過点として位置づけられている。

また、学生であるPA の責任範囲については、センターでも懸念事項ではあるが、PA と教職員アドバイザーとの責任の線引きは、個々の学生の状況次第において変化するという認識であった。PA は学生でありながらも大学スタッフの一員であり、アドバイジングを受ける学生にも、大学や教職員に対しても公平な態度で臨むべきであることから、PA としてのプロ意識を涵養するトレーニングの必要性を検討中であるとの説明があった。ピアによる学習支援の範囲という点ではケースバイケースの中で着地点を模索しつつある。

4.3. Learning Assistance Center

成績の低い学生だけではなく、科目の成績を少しでも良くしたいと思う学生層（主には

新入生および編入初年度生)を対象として、学部生チューターによる1対1のチュータリングおよび Supplemental Instruction (補習授業: SIセッション)を実施している。図書館のスペースの一部を使用しており、SSC(前述)の一部を構成している。利用は無料。

センターでは、「誰かと一緒に勉強する」ということを強く推奨し、ラーニング・コミュニティという概念を重要視している。SSC内の学習スペースを活用することで、誰かと対話をしながら、学生同士が教え合い、わからなくて困っているときに助けてもらうことで、よりよく学ぶことができる場を創出している。授業では、教員が教えることについて学生は全てを理解することは難しい。サポートによって学生が気づいていない部分に気づき、補うことができるのがチュータリングの価値であるとの理解の下、運用指導にあたっている。

チュータリング対象の科目数は24科目であり、ほとんどがコア科目である(数学、化学、物理学、経済学などの基礎科目)。SSC内のある一角において、机、または「ポッド」と呼ばれる簡易個室を使って実施している。

SIセッションは、物理学・経済学・化学・数学等の入門科目で300人規模の大規模教室での講義を中心に、25%-30%以上がD以下の成績をつけられている「危険科目」を中心に設定して開講している。学生チューターがSIセッションの運営をまかされている。SIセッションは、双方向的な協同学習の場であり、チューターは方法に工夫を凝らしている。魅力のあるセッションができなかった場合、参加する学生が減って行くためである。

組織体制については、センターは当初、学生部の下に置かれた「カウンセリング&スチューデント・ディベロップメントセンター」の中の一つのプログラムであった。その後、学士課程教育部に改組された際、SSCのもとに学生支援のユニットを置きたいと考え、学生部から当該センターが分離され、SSCに移管されたものである。

体制は、専属教員2名(1名は同支援職務において長い勤務経歴を持っている。なお、職員配置はなし)で構成されており、有給

の学生チューター20名と無給のボランティア学生チューター25名程度で運営している。勤務形態の差異としては、有給者は個別チュータリング(4時間)とSIリーダー(6時間)の両業務に週10時間従事するのに対し、ボランティアは個別チュータリングのみを行う。有給者は予算の関係で20名に限定されているが、有給者もボランティアも、同様のトレーニングを受け、チューター活動にあたっており、質的な差はなく、チュータリングを受ける学習者側からの区別もない。チューターの育成に関して、CRLA等第三者機関が定めるガイドラインには準拠しておらず、また、学内の他のセンターとの頻繁な連携は行っていないとのことだった。なお、チューターはすべて学部生であり、大学院生は教員の一部であり、「ピア」ではないとの認識であった。

同センターを活用することによる、学生への効果は「学びのゴールに達成するための適切な学習スキルを使えるようになる」、「個々の学習ニーズにフィットした学習方法を調整できるようになる」、「他者と効果的に学ぶ方法を身に付ける」、「効果的な学習方法を用いることができる」、「自立的な学習行動ができる」、「講義内容の実用性について理解できる」という5つが列挙されている(同センターWebサイトより)。

センター担当教員の見解として、学部生はプロフェッショナルとまでは言えないが、実はたくさんのスキルを持っている存在だと認識しており、その意味で、センターは教職員主体というよりは、学生によって開発された、学生のためのサービスだというコンセプトであった。具体的には、学生チューターがセンターの活動にアイデアを出して行くことが最も重要であり、例としてマーケティングが得意な学生スタッフがアナウンスを作るなど、学生には今までとは違ったやり方に挑戦させているという。その意味では、センターの取り組みは開発途上にあるとの見解であった。

4.4. Writing Center

レポート、研究論文、履歴書、レター、そ

の他「書く」ことに関して、支援することを目的として設置されている。どのような段階にあっても、訓練されたスタッフが対応可能。利用者は、学生だけでなく、マノア校の構成員であれば、教職員、客員研究員でも利用できる。利用は無料。

元々は図書館の一角に設けられていたが、主管部署である英語学科の建物に移転し、現在に至っている。センター長（教員）は英語学科の教員であり、学科の授業も担当しながらセンターの役職を担っている（センター専属教員ではない）。

チュータリングは1対1で、事前予約制（Webシステムを導入）である。朝9時から5時まで開室しており、2012年度秋学期の実績は814セッション（1セッション30分）の利用があった。チュータリングは全学科を対象とし、30分セッションを週に2回まで予約できるが、予約時間に2回来室しなかった場合は、その後の予約は保留される。なお、最終試験前は、チューター自身の試験勉強を優先し、チュータリングの提供は行わない。

体制は、センター長のもと、7名の大学院生チューター（うち5名は英語学科、2名は他の外国語専攻）と、センター長自身の科目Composition Pedagogy（4年生担当）の受講生の中から15名を選抜し、学部生ピアチューターとして採用している。学部生ピアチューターは、時給10ドルで週5時間勤務、うち、3.5時間をチュータリングにあて、1.5時間をジャーナル執筆にあてている。ジャーナルが当該科目の課題となる。当該科目では、Compositionの理論とWriting Center、チュータリングの理論を教え、実習の場としてチュータリングを連動させている。

センターの活動においては、高等教育における英語教育の学会であるNational Council of Teachers of English、英文ライティングの機関誌The Writing Lab等学外のリソースを活用しながら、チュータリングを運営している。CRLA等、学習支援に関するチューター育成については見聞きした経験がないということであった。

5. まとめと考察

これら4つの学習支援組織における構成要件をまとめたのが下記の表である（表1）。

表1 ハワイ大学マノア校
学習支援組織における支援内容

	Student Success Center (SSC)	Manoa Advising Center (M.A.C.)	Learning Assistance Center	Writing Center
(1) 目的	学生のどんな質問も受ける場所（コンシェルジュ）	学部・進路が未決定の学生対象（全員必須）	成績を少しでも良くしたい授業科目のチュータリング・SIセッション運営	レポート、研究論文、履歴書等「書く」ことへの支援を行う
(2) 学習環境	図書館の1Fが学習スペース24時間オープン	学生によるアドバイジング導入。オープンスペース（個室対応可）	SSCの一角、ラーニング・コミュニティを重要視	英語学科の下で運営
(3) サービス内容	チュータリング（1対1）※育成はLAC	学生生活人生選択を支援	コア科目のチュータリング、SIセッション	チュータリング（1対1）
(4) 組織・スタッフ体制	職員中心 学部教員との連携を構築中	教員4名 PA31名 PAの研修は教員	教員2名、チューター45名（有給20、無給25）	教員1名 院生7名 学部生（4年生）15名
(5) 役割・位置づけ	サービスへの適切な誘導・自律的学習支援	PAがプロ意識をもてる育成検討	学生による学生のためのセンター	学会、機関誌等を活用

同校における多様な学習支援サービスのうち4つを取り上げても、対象、内容、組織・スタッフ体制、育成方法、学内における位置づけは多様であることがわかる。

各センターでは、修士・博士号を持つスタッフが生き活きと働き、各人が有する専門知識と経験を発揮したプロフェッショナルな支援を展開している。なお、これらのセンターに所属している教員は、学部所属ではないため、授業を受け持っていない（Writing Centerを除く）。また、教職員だけではなく、学生自身をリソースとして大学内に公式な制度として組織内に位置づけることで、学習者と学習支援者の両方の成長を促し、ひいては、学生全体の学習経験の豊富化および質保証に貢献するサイクルが築かれていることが示唆

されている。各センターにおいて実施されている学生スタッフ育成（トレーニング）の持つ意味は、教職員の持つ専門的知識やスキルを彼らに教授することだけではなく、学生の持つ潜在的スキルや能力を引き出し、実践の中で磨き上げて行くプロセスをいかに効果的・効率的に運営できるかという点において我が国におけるピアチューター育成の仕組みについて、同校における実践から学ぶべき点が多い。

このように、同校では米国の大規模大学における多様な学生の学習ニーズに対応すべく各センター・機関が設置されているが、各センター間にはゆるやかな連携はあるものの、利用者に関する緊密な情報交換、運営およびスタッフ育成の点でのノウハウを積極的に共有している様子は見られなかった。各センターが自律的に運用され、独自性を持ちながら発展しながらも、対象や目的を細分化しすぎることによって、一人の学生を複数のセンターで対応することから、学生が抱える悩みや問題が断片的な把握にしかならず、本来必要な支援が行き届かないなど、総合的な学習支援の体制構築にあたってのデメリットとなる可能性も否定できない。この点では、我が国の大学における縦割り組織の弊害と同様、課題であると言えるのではないだろうか。

6. 今後の課題

本調査で得られた成果から、学習支援組織を類型化（モデル化）し、教員または職員に必要とされる知識やスキル、経験、およびそのような教職員の確保と養成、質の高い学習支援を提供可能な学生スタッフ（ピアチューター）育成に必要な要件、組織間の連携や環境整備（施設面、組織運営面等）について他大学の事例等、調査を継続する。

それぞれの組織モデルについて評価し、メリット・デメリットを明らかにした上で、我が国の高等教育機関における学習支援システムの構築に合致するモデルを提案することとしたい。

謝辞

本稿は、科学研究費（基盤 B）「ピアチューターリングを取り入れた高等教育における統合型学習支援システムの開発」（研究代表者：美馬のゆり、課題番号：24300287）の支援を受けている。

参考文献

Learning Assistance Center, University of Hawaii at Manoa. <https://manoa.hawaii.edu/learning/> (2014年1月12日最終アクセス)

Manoa Advising Center, University of Hawaii at Manoa. <http://www.manoa.hawaii.edu/mac/> (2014年1月12日最終アクセス)

Manoa Advising Center, University of Hawaii at Manoa. <http://www.manoa.hawaii.edu/mac/> (2014年1月12日最終アクセス)

美馬のゆり、鈴木克明、椿本弥生、渡辺雄貴、根本淳子、大塚裕子（2013）ピアチューターリングを取り入れた高等教育における統合型学習支援システムの開発。日本教育工学会第 29 回全国大会発表論文集、167-170

Student Success Center at Sinclair Library, University of Hawaii at Manoa. <http://guides.library.manoa.hawaii.edu/gohere> (2014年1月12日最終アクセス)

鈴木克明、美馬のゆり、山内祐平（2011）大学授業の質改善以外の学習支援にどう取り組むか：学習センター関連資格制度についての米国調査報告。日本教育工学会研究論文集 11-1:181-186

谷川裕稔、壁谷一広、中園篤典、長尾佳代子、堤裕之 編著（2013）学士力を支える学習支援の方法論。ナカニシヤ出版、京都

The Writing Center, Department of English, University of Hawaii at Manoa. <https://sites.google.com/a/hawaii.edu/writingcenter/> (2014年1月12日最終アクセス)

全国大学生生活協同組合連合会（2013）第 48 回学生生活実態調査の概要報告 <http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (2014年1月12日最終アクセス)